

複言語教育の思想と方法—plurilingualism と plural identities に着目して—

【発表構成】

- I.はじめに
- II.複言語教育とは何か
  - i.複言語主義の定義
  - ii.複言語教育の事例—「複言語のすすめ」について—
- III.複言語教育の特質とは何か
  - i.複アイデンティティの定義
  - ii.多文化教育との比較による考察
- IV.おわりに

I.はじめに

本特講の「展開1：教育目標と教育方法の検討」においては、「展開3：教育目標・内容・方法の授業化」において開発する「平和科目」授業モジュールの目標・内容・方法としてどのようなものが考えられるか、また、その目標の背景となる平和の概念、平和とは、若しくは、非平和とはどのような状況を指しているのか、ということについて検討することが求められている。そこで、これまでに紛争解決教育をはじめとした6つの教育に着目し、それぞれがどのような目標のもとでどのような内容・方法によって進められ、平和をどのようなものとして捉えているのかについて明らかにしてきた。本稿では、複言語教育について、複言語主義(plurilingualism)と複アイデンティティ(plural identities)の観点から分析を行い、これまで同様に「平和科目」授業モジュール開発に示唆するものについて考察することを目的とする。したがって、RQを以下のように設定する。

RQ：「平和科目」授業モジュール開発への示唆とされる、複言語教育の利点と限界は何か。

SQ1：複言語教育とは何か。

SSQ1：複言語教育において平和をどのように捉えられているか。

SSQ2：複言語教育の内容・方法とはどのようなものか。

SQ2：多文化教育と比較することで見えてくる複言語教育の特質とは何か。

II.複言語教育とは何か

i.複言語主義の定義

複言語教育としての授業や教材等は、複言語主義(plurilingualism)の考えを根本として開発されており、その目標は複言語主義に基づいている。そこで、はじめに複言語主義とはどのようなものであるのか

について、ここでは柳瀬(2007)の論に従って明らかにしていく<sup>1</sup>。

複言語主義とは 46 カ国から成る欧州評議会(言語政策部門)によって 2001 年に提唱された新造語であり、欧州連合における言語政策の理念と実践的提案を記した「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠(CEFR)」の基本理念とされるものである<sup>2</sup>。この複言語主義について、複言語主義と混同されやすい多言語主義と比較しながら柳瀬は以下のように述べている<sup>3</sup>。

多言語主義とは、ある社会においていくつかの言語が共存している(そのうちいくつかは公用語として認定されている)状態を表している。だが、その社会の成員の個々人がそれら全ての言語に習熟しているかどうかは問題ではない(実際問題として、多数の公用語全てに高度な習熟を示す人間は例外的存在に過ぎない。) それに対して複言語主義とは、ある人間が、1 つ以上の言語に、たとえ部分的とはいえ開かれていて、ある程度の複合的な能力を持ち、コミュニケーションのための言語を自分の第一言語だけに限定しない価値観を有することを意味している。

つまり、多言語主義が社会の状況を表す用語であるのに対し、複言語主義は個々人がもつ能力や価値を表す用語であると捉えられるのである。

このような複言語主義が 21 世紀に突入した直後、ヨーロッパにおいて提唱され、成立したのには理由がある。そもそもヨーロッパは様々なエスニック・グループや国民イデオロギーなどが錯綜していた地域ではあったが、広場に象徴されるように「公共的空間(public space)」を確保する伝統を有しており、人々はそこで言語・宗教・文化・経済・社会といった要因の差異を越えて、「市民」の理念を形成していった。しかし、その「市民」の理念にも関わらず、19 世紀初頭の「国家=国民=言語」という言語ナショナリズムにより、国家とは同じ言語を話す、同じ国民の共同体であると考えられるようになる。これにより主要言語が国民的言語あるいは公用語として使用され、それら以外の言語はプライベートな場でのみ使用されることとなり、いつしか多くの人々がモノリンガルである状況へとなっていった。この後、人口の動きは激しくなり、既存のマイノリティに加え、移住者が新たな言語マイノリティを形成し、主要言語を話さない多くの人々は、言語による交流の機会が閉ざされ、相互不理解と敵対の可能性を有しながらヨーロッパに居住しているのである。つまり、「母語によるエスノセントリズム」が生じている。その一方で、経済合理性至上主義から多言語の使用はコストがかかるので共通語の使用が望ましいとされて 1990 年代から英語のグローバル化が加速化し、さらに、英語はコミュニケーションのための共通語を超え、「国際共通」的な生き方・社会のモデルを象徴する言語として認識されるなど、他の言語を圧倒する力を有するようになってきているのである。つまり、「英語によるグローバリズム」が生じている。このようなヨーロッパにおける「母語によるエスノセントリズム」と「英語によるグローバリズム」の 2 つの間に存在する緊張の対立関係を改善するものとして打ち出されたのが複言語主義なのである。

つまり、複言語主義は、母語、若しくは、英語を唯一の使用言語とし、他の言語を使用せず、その価値の拒絶することで相互理解がなく、多様性を認めない、共生不可能な社会を問題的な状況であるとし、一

<sup>1</sup> 柳瀬陽介(2007)「複言語主義(plurilingualism)批評の試み」『中国地区英語教育学会研究紀要』37,pp61-70.

<sup>2</sup> Council of Europe. (2001). Common European Framework of References for Languages : Learning, Teaching, Assessment. Cambridge : Cambridge University Press.

<sup>3</sup> 前掲柳瀬(2007),p62.

言語に閉ざされない複合的言語力と言語的寛容を有することで相互理解ができ、多様性を認める、共生可能な社会を望む考えである。この考えを目標に反映させながら複言語教育は開発・実践されている。したがって、複言語教育は前述した共生不可能な社会を非平和、共生可能な社会を平和な状況として捉え、その平和な状況を形成し、維持する人の育成を目指す教育であると考えられる。

以上のことから SSQ1 に対して、以下のように答えを導くことができる。

SSA1：複言語教育における平和とは、1 つ以上の言語に開かれていて、ある程度の複合的言語能力とコミュニケーションのための言語を自分の第一言語だけに限定しない価値観を有することで、異なる言語コミュニティ同士が相互理解でき、それぞれの言語の多様性を認め、様々な言語コミュニティが共生することが可能な状況のことである。

## ii. 複言語教育の事例—「複言語のすすめ」について—

それでは具体的な複言語教育の事例として、ここでは森泉(2008)が開発した外国語学習用導入教材『複言語のすすめ』を取り上げることとする<sup>4</sup>。ただし、本稿では紙幅の都合上、事例を 1 つしか取り上げないため、複言語教育の内容や方法が一般的にどのようなものかといったことについては想定の外を出ないとする。

この『複言語のすすめ』は教材であり、A2 版 4 つ折り 8 ページ仕立て両面カラー印刷のグラフィックなパンフレットとなっている。本教材は複言語主義の概念や各種専門用語、各言語独自の情報などについての説明を大幅に削減したものとなっており、その削減された部分は併せて作られた A4 版 26 ページから成る「教師用資料集」に掲載されている。言い換えれば、資料集を必要最小限のエッセンスにまとめたものが本教材といえる。

本教材はそれぞれのページで異なる内容を扱っている。それぞれのページがどのような目標・内容なのかについて以下のようにまとめられる。ちなみに補足情報として、この教材の対象は大学生で、内容は 3 時間分の授業を想定している。

ページ 1：表紙

【目標】なし

【内容】なし

ページ 2：世界で一番話されている言葉

【目標】自分が関心を寄せる個別言語の知識と並んで、言語一般についての知識を獲得させること

【内容】「世界中に現在、約 6000 の言語があるとされています。そのうち、21 世紀末までに 90% の言語が死滅するのでは、とも言われています。」というショッキングな一句から始まり、世界の母語人口上位 20 と世界の言語別使用人口上位 10 が示されている。それらのランキングの上位 4 つについては空欄になっており、それについて予想させることを促すものになっている。

<sup>4</sup> 森泉(2008)「世界の言語とつき合うための導入教育—第二外国語導入教材〈複言語のすすめ〉の構想と実践—」『慶應義塾大学日吉紀要 ドイツ語学・文学』44, pp47-78.

### ページ 3：なぜ複数の言語を学ぶのか？

【目標】 様々な言語を学ぶことで自分がいかに豊かになるかということについて理解させること

【内容】 「なぜ複数の言語を学ぶのか？」の答えとしての 3 項目が述べられており、「多彩な文化は人類の宝」では、言語の多様性が文化の多様性を育み、多様性は生態学的視点から見ても重要であることを、「複数の言語知はメタ言語感覚を育てる」では言語はある意味で最大の文化遺産であり、また、複数の言語を学ぶことを通してメタ言語感覚が身につく、言語そのものへの理解が深まって柔軟で多面的な思考力を生むことを、そして、「自分の夢と結びつく言語能力」では、国際社会での相互理解に果たす言語の重要性を再確認し、そのためには相手の言語を話すことが大事であることを述べている。

### ページ 4：街角の外国語

【目標】 現代日本の日常生活で普段何気なく目にしている外国語を再認識させること

【内容】 東京都心で目についた外国語表示の写真が複数掲載されており、複数の言語で示された化粧室の表示や観光地図、お菓子のパッケージなどが挙げられている。ちなみにここで見られる言語は日本語、英語、中国語、朝鮮語、ロシア語、アラビア語、フランス語、ドイツ語、スペイン語である。

### ページ 5：この言葉を話してみたい！

【目標】 言語のイメージを意識化し、そのズレを検証させること

【内容】 「愛を囁くなら( )語」「学問を論ずるなら( )語」「歌を唄うなら( )語」「神と語るなら( )語」「詩を吟ずるなら( )語」というフレーズが掲げられており、ラジオで様々な言語を聞く中でそれぞれの( )に当てはまるものを見つけるという活動を想定したものであるとされる。また、「ありがとう」「さようなら」「春」「夏」「秋」「冬」について表記した 8 言語が示されている。

### ページ 6：言葉の違いを比べてみよう！

【目標】 様々な言語の文法・言語学的側面について理解させること

【内容】 ここでは 3 つの項目について挙げられており、1 つ目は、語順のタイプと世界の言語がどれに属するのかのパーセンテージが示されている。2 つ目は、ヨーロッパにおける名詞の性という視点からどのように分類されるのかという比較表が示されている。3 つ目は、日本語の「行く」「兄と弟」「稲、米」が中国語、英語、ドイツ語、ロシア語、フランス語でどのように対応しているかが示されている。

### ページ 7：まずこの一言を覚えよう！「サバイバルのための一言」

【目標】 様々な言語における実用的なフレーズについて知り、実際に使えるようになること

【内容】 様々な言語における「お願いします」や「すみません」、「トイレはどこですか」といった実用的なフレーズが 8 つ、それぞれの言語表記で記されており、併せて意味が示されている。

ページ 8 : 外国語を学ぶときの 4 つのヒント

【目標】 支配的言語の常識を相対化し、新たな知り得た言語や言語間の相違について面白いと感じれる精神をこれまでの内容のまとめとして再認識させること

【内容】 4 つの項目が挙げられており、それぞれで「異なった言語・異なった文化に親しむことが、人間の営みをより深く知ることにつながる」「慣れ親しんだ言葉と違うから間違え、だからこそ面白いと感じるセンスが大切だとする視点」「どんな言語も人間の脳に合わせて作られているのだから、自然体で向き合えばいいという態度」「言葉を学ぶことで色々な世界の扉を開けられるという思いの大切さ」が述べられている。

方法については、教師の裁量に任せるものとしており、講義形式で教授されたり、自ら考えたり、グループで話し合ったり、実際に複数の言語を口に出したりなど様々な方法が想定される。

複言語主義とは、ある人間が、1 つ以上の言語に、たとえ部分的とはいえ開かれていて、ある程度の複合的な能力を持ち、コミュニケーションのための言語を自分の第一言語だけに限定しない価値観を有することを意味している<sup>5</sup>。このことから複言語教育では、ある程度の複合的な言語能力を持つこと、つまり、「能力としての複言語主義」と、コミュニケーションのための言語を自分の第一言語だけに限定しない価値観を有すること、つまり、「価値としての複言語主義」の 2 つを、平和な状況として捉えられる共生可能な社会を形成し、維持することができるようになるという大きな目標に下位に位置づく中目標としていると捉えることができる。この「複言語のすすめ」のそれぞれのページの目標に着目してみると、ページ 2~4 は「価値としての複言語主義」に、ページ 5~7 では「能力としての複言語主義」に重きを置いており、まとめとしてのページ 8 では「価値としての複言語主義」に重きが置かれている。このことからこの「複言語のすすめ」について考察され、複言語教育について推測されることとして、「能力としての複言語主義」に重きを置く学習と「価値としての複言語主義」に重きを置く学習が内容の量的に偏っていることなどが無いことから、言語能力の育成と価値観の獲得の双方が重要であるとされているということである。よって、これら双方の目標を達成することが、複言語教育が考える平和の形成に繋がっていくと考えられる。

以上のことから SSQ2 に対して、以下のように答えを導くことができ、引き続いて SSA1 と SSA2 から SQ1 に対しても答えを導くことができる。

SSA2 : 複言語教育の内容としては、様々な言語の数や使用状況についてのデータや日常生活で見られる様々な言語表記といった中目標「価値としての複言語主義」に繋がるものと、様々な言語における特定の対象の表記と読み方や実用的なフレーズといった中目標「能力としての複言語主義」に繋がるものの 2 つに大別される。方法としては、講義形式で教授されたり、自ら考えたり、グループで話し合ったり、実際に複数の言語を口に出したりなど様々なものが想定される。

<sup>5</sup> 前掲柳瀬(2007),p62.

SA1：複言語教育とは、平和として捉えている「異なる言語コミュニティ同士が相互理解でき、それぞれの言語の多様性を認め、様々な言語コミュニティが共生できる状況」の実現を大きな目標とし、その下位目標として、ある程度の複合的な言語能力を持つこと、つまり、「能力としての複言語主義」と、コミュニケーションのための言語を自分の第一言語だけに限定しない価値観を有すること、つまり、「価値としての複言語主義」の2つが設定されている教育である。

### Ⅲ. 複言語教育の特質とは何か

#### i. 複アイデンティティの定義

ここで、複言語教育の特質をより明らかにするために、本稿の前で取り扱われた多文化教育との比較を試みる。多文化教育とは一体どのようなものであるのかということであるが、『新版 現代学校教育大事典』によると「一つの国民社会内の異なった民族集団の共存のために意図された教育」とされ<sup>6</sup>、また、『現代国際理解教育事典』によると「人種や民族、社会階層、ジェンダー、性的指向性、障がいの有無などあらゆる文化集団に属する人々に構造的な平等、及び集団間の共存・共生の実現をめざす教育理念及び、教育実践であり、教育改革運動である」と定義されているものである<sup>7</sup>。異なる文化集団に属する人々の共存・共生を目指すという点で複言語教育と非常によく似た教育であるが、両者のある明確な共通点と相違点を複アイデンティティという同一の観点から挙げるができる。

複アイデンティティとは一人の中にも存在する複数のアイデンティティのことである。例えば、ある個人はいくつもの役割をもっており、「夫としての私」「父親としての私」「教師としての私」といったそれぞれのアイデンティティを有している。つまり、複数の役割を担うことでアイデンティティの複数化が行われているのである。これは文化面でも同じように言うことができる。文化の中でも言語を例に挙げてみると、ある人が日本語の概念とイメージをもって日本語を話せば日本語コミュニケーションを行うという役割をもち、「日本語を話す者としての私」というアイデンティティが形成され、同様に「英語を話す者としての私」というアイデンティティも形成されれば、一個人の中に複アイデンティティが生まれるのである<sup>8</sup>。

#### ii. 多文化教育との比較による考察

それではそのような複アイデンティティといった一つの観点から挙げられる多文化教育と複言語教育の共通点と相違点はこういったものなのだろうか。

まず、共通点として挙げられることは、両方とも複アイデンティティを形成させ、自覚させているということである。多文化教育では、前発表で取り上げられた「ひょうたん島問題」を例にすると、シミュレーション上において自らがひょうたん人などの文化を知り、ひょうたん人などの役割を担うことで複アイデンティティを形成させ、その上で「カーニバルがやってくる」などといった問題に対して解決策を複

<sup>6</sup> 木村一子(2002b)「多文化教育」安彦忠彦・新井郁男ほか編『新版 現代学校教育大事典』(4),ぎょうせい,p.547.

<sup>7</sup> 森茂岳雄(2002b)「多文化教育」日本国際理解教育学会編『現代国際理解教育事典』明石書店,p216.

<sup>8</sup> 池野範男(2017)「日本における多文化教育の論争点と課題—複アイデンティティ形成に焦点を当てて—」学習システム促進研究センター『学習システム研究』(5),pp45-58.

アイデンティティそれぞれの視点から考えることで複アイデンティティを自覚させることができる。複言語教育では、様々な言語についてそのイメージを明確化させ、実際にコミュニケーションツールとして口に出させることで複アイデンティティを形成させ、使用言語は一つ限られないという価値観を獲得させることで複アイデンティティを自覚させることができる。このような複アイデンティティの形成と自覚は異なる文化・言語集団に属する人々が相互理解するうえで重要な役割を担い得ると考えられる。

一方、相違点としては挙げられることは、複アイデンティティ間の対立や葛藤の調整が行われるか否かということである。多文化教育では、前述したように、問題に対する解決策を考える際に、複アイデンティティそれぞれの視点からどのアイデンティティによる主張が妥当か、また、複アイデンティティそれぞれの主張から新たな主張を見出すことはできないかといった思考を行い、複アイデンティティ間の対立や葛藤の調整が行われる。しかし、複言語教育では、複アイデンティティを形成し、それぞれの視点を有するに留まってしまふ。それでは、何か事が起こった際、それぞれの言語の価値やアイデンティティを尊重するだけで、それぞれが主張することを調整して解決することは求められていないのである。これを図にして表すと以下のよう図1になる。

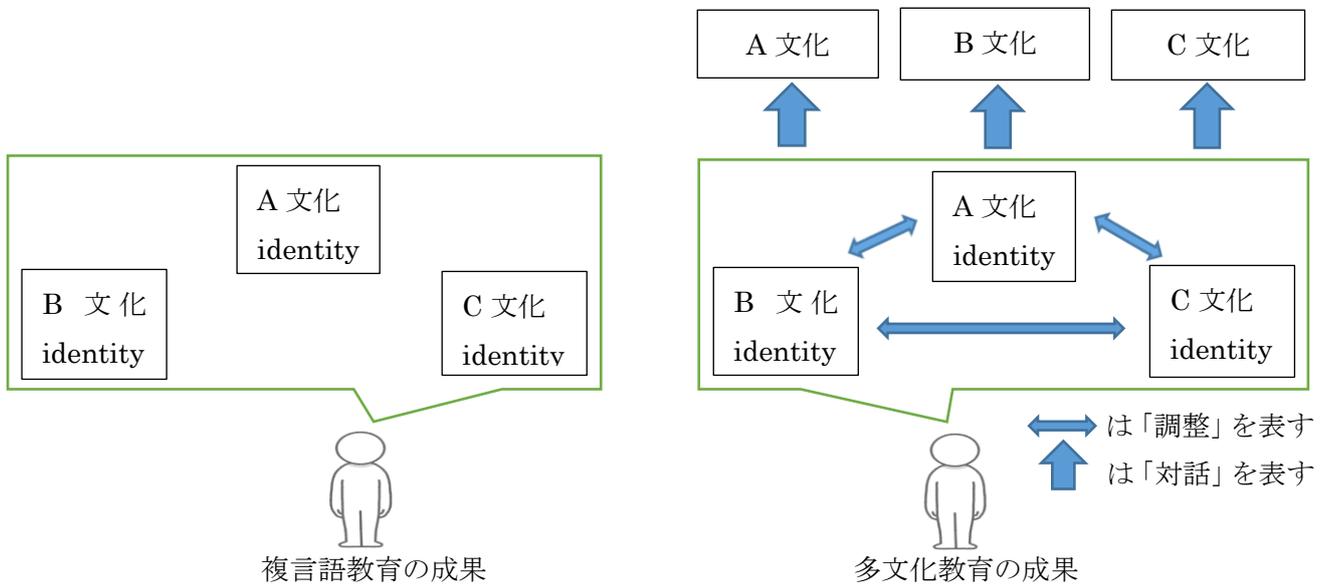


図1 複言語教育と多文化教育における複アイデンティティの違い

つまり、複言語教育では、文化の違いを分かること、認め合うことが重視されているに対し、多文化教育では、それらをふまえて、それぞれの文化と会話し、それぞれの文化の、又は、それぞれの文化間の問題について解決することが重視されているのである。

以上のことからSQ2に対して、以下のように答えを導くことができる。

SA2：多文化教育と比較することで見えてくる複言語教育の特質として2つ挙げられる。1つ目は、複アイデンティティを形成し、その自覚を促しているということ、2つ目は、複アイデンティティ間での対立や葛藤の調整を行う能力の育成が図られていないということである。

#### IV.おわりに

最後に「平和科目」授業モジュール開発という視点から見た、複言語学習の利点と限界について考える。まず利点として、授業内で扱う言語を生徒が普段使用する言語や生活する地域の点から考慮して選択することで、生徒にとってより身近で考えやすい授業にすることができる。つまり、地域の特質に柔軟に対応でき、生徒が思考するのに最も適切な内容を選択することが可能なのである。「平和科目」授業モジュールを開発する際、その開発されたものが様々な地域、文化圏の人たちに臨機応変に適用することが可能なものになっているかについて考えなくてはならないのでは、という示唆がこのことから与えられる。また、複言語教育では複アイデンティティが形成され、他者の様々な考えや立場にたつという感覚を得ることができる。

しかし、複言語教育では、複アイデンティティを形成し、様々な考えや立場にたつだけに留まってしまい、複数のコミュニティ間で解決すべき問題が起こった際、それぞれの考えや立場、アイデンティティを尊重するだけで、それぞれが主張による対立・葛藤を調整して解決することができないという限界がある。

以上のことから RQ に対して、以下のように答えを導くことができる。

複言語教育は、地域の特質に柔軟に対応でき、生徒が思考するのに最も適切な内容を選択することが可能であることや、複アイデンティティを形成し、様々な考えや立場にたつことが可能であるといった利点がある。その一方で、形成された複アイデンティティそれぞれの主張による対立・葛藤を調整して解決することはできないという限界がある。